

横浜絵本研究会REPORTS

No. 1

March 2024

絵本に描かれた「いじめ」の登場人物と解決パターンの日米比較研究
—どんな子どもに育てようとしているか—

Differences in the character and resolution patterns between Japanese and American
picture books for children with bullying themes: The children they mean to raise

仁平 義明 伊豆田 麻子 藤井 淳子 小野 由美子

Yoshiaki NIHEI Asako IZUTA Akiko FUJII Yumiko ONO



【研究論文】

絵本に描かれた「いじめ」の登場人物と解決パターンの日米比較研究 —どんな子どもに育てようとしているか—

Differences in the character and resolution patterns between Japanese and American picture books for children with bullying themes: The children they mean to raise

仁平 義明¹ 伊豆田 麻子² 藤井 淳子³ 小野 由美子⁴

Yoshiaki NIHEI Asako IZUTA Akiko FUJII Yumiko ONO

【要旨】

本研究は、「いじめ」をテーマにした日米の代表的な5冊ずつの絵本について比較分析を行った。分析された項目は、「いじめ」の被害者・加害者・傍観者・擁護者等の役割分化とそれぞれの特徴の描かれ方、いじめの形態、最終的に誰が「いじめ」の解決に貢献したか、解決パターン等であった。その結果、最も重要な違いは次のような点にあった：(1) アメリカのいじめ絵本では、犠牲者の行動や認知的変化、あるいは加害者の後悔が最終的解決につながっていた。

(2) 日本の絵本5冊のうち4冊で、母親が解決のための決定的な役割を果たしていた。この差は、統計的に有意であった。言い換えると、アメリカの絵本は、原因帰属に関して物事の成否の最終的決定因は自己の内部にあるという「内的帰属」の考え方を子どもに形成させることを意図していた。他方、日本の絵本は、物事の決定因は自己の外部にあるという「外的帰属」の考え方の形成につながっていると考えられた。「いじめ」絵本の文化差は、表面的ないじめの解決要因の違いにあるのではなく、考え方の基層にある、子どもにどのような信念を育てようとしているかの差にあるといえる。

キーワード：絵本、いじめ、日米比較、内的帰属・外的帰属

1 はじめに

「bullying (いじめ)」をキーワードにして国際的な心理学の研究文献データベース「PsycINFO」で検索をすると、ヒットする文献の累積数は、2000年は529件、2010年は3,666

¹白鷗大学・東北大学名誉教授 Email: niheyoshiaki@gmail.com

²星槎大学客員研究員

³星槎大学客員研究員

⁴鳴門教育大学名誉教授、早稲田大学招聘研究員

件、2020年には13,022件と、幾何級数的急増パターンを示している。この変化からは、「いじめ」が年々世界的に切実な問題になってきていることがうかがえる。

近年、いじめ絵本については「内容分析」が行われるなど、子どもの教育に関する研究の対象として重要な位置を占めるようになってきている。

たとえば、アメリカ国内の「いじめ」絵本の内容分析を行ったOppliger & Davis (2016) の研究¹⁾では、「誰の視点からのストーリーか」(たとえば犠牲者の目からか、傍観者の視点からか)「いじめの場」(学校など)「いじめっ子と犠牲者の特徴」「いじめの形態」「犠牲者の対応方策」「結末・解決」「親・仲間・傍観者の役割」が分析項目になっていた。Wiseman & Jones (2018)も、アメリカ国内の「いじめ」絵本の内容分析²⁾を行っているが、項目は、「いじめの形態」「加害者の特徴」「犠牲者の特徴」「いじめの場」「犠牲者の対応」「傍観者の役割」「大人の役割」「葛藤の解決」と、ほぼ同じものである。

韓国の絵本についても、Jang & Kim (2020) が「いじめ」絵本の内容分析研究を行っている³⁾。ここでは「犠牲者の特徴」「犠牲者の対応方策」「解決のパターン」が分析項目であった。

しかし、異なる国の「いじめ」絵本について比較文化的な分析を詳細に行っていくと、それぞれの社会・文化には絵本を通じて基本的にどのような考え方の子どもを育てようとしているか、たとえば“何が物事の成否をコントロールしているか”という「原因帰属」^{4) 5)}の信念をどのような方向に形成しようとしているという点で、大きな違いがあることが明らかになってくる。

2 研究による「いじめ」の実態と絵本の「いじめ」イメージの乖離

絵本の「いじめ」に関する内容は、作者や編集者の主観的なイメージに依存する可能性があり、さまざまな研究から明らかになってきた実態から乖離していることがある。

Becnel (2013) は、「いじめ」絵本では実態と乖離したステレオタイプが描かれる危険性を警告している⁶⁾。たとえば、絵本で「いじめっ子」は、しばしば粗暴で賢明ではない子というイメージで描かれるが、いじめの実態についての研究結果が示しているのは、後述するように「首謀者」はむしろ対人的に受けの良い、集団内地位が高い子であるというたぐいの事実⁷⁾である。

「いじめ」絵本が教育効果を意図して書かれたものであるなら、子どもの「いじめ」対応が現実に関心をもつためには、絵本の内容がステレオタイプの「いじめ」イメージに依拠して「いじめ」の実態と乖離しているか、それとも実証的な研究結果からのエビデンスと一致するものであるかどうかは重要なポイントになるからである。

2-1 「いじめ」での役割分化—研究による実態の解明

「いじめ」の役割分化と、それぞれの役割の子どもの特徴を最も綿密に調べた代表的研究といえるものは、オランダの主要な3つの大学の研究者による共同研究 (Olthof et al., 2011) である⁷⁾。

研究は、17の小学校の4・5・6年生を対象にした大規模調査であった。子どもたち全員に、学級のどの子がさまざまな形態のいじめの行為をどの程度の頻度で行ったのか、どの子がどの役割だったか、具体的な名前を挙げさせる手続きによる研究が行われている。結果では、「いじめ」での役割(割合)は「いじめ首謀者」(6.7%)「犠牲者」(7%)「首謀者兼犠牲者」(3.5%)「いじめ助手」(9%)「強化者」(5.8%)「傍観者」(21.7%)「擁護者」(18.4%)の7通りに分化していた。「首謀者兼犠牲者」は、いじめの首謀者にもなるが犠牲者にもなる子どもである。「強化者」というのは、「いじめ」で笑ったり、はやしたてたりすることで首謀者に「正の

強化子」(報酬)を与える子どもである。

フィンランドのSalmivalli et al. (1996)も6年生を対象にして、「首謀者兼犠牲者」を挙げていることを除けば、Olthofらの研究と同じ6つの役割、それぞれの役割について類似した割合を確認している⁸⁾。

なお、日本の文部科学省(2013)は『いじめの防止等のための基本的な方針』⁹⁾の中で「いじめ」での役割として「加害者」「被害者」「傍観者」「観衆」(Olthofらの「強化者」にあたる)の4つのみを挙げている。ただし、役割を抽出した根拠も役割の割合も明示されていない。

こうした「いじめ」にかかわる子どもの役割構成、それぞれの役割の子の特徴を絵本がどう扱うかは、たんなる役割の数の問題ではない。それらは、「いじめ」が起こり、持続し、解決される実際の過程・しくみを子どもにどう理解させるか、さらには子どもが「いじめ」に将来どう対応するかに関係する。

2-2 それぞれの役割の子が持つ特徴—先行研究が示す実態と絵本のイメージの乖離

Olthofらの研究は、「いじめ」でそれぞれの役割を果たしている子どもの割合だけでなく、「いじめ」にかかわる子どもの心理的・行動的な特徴(表1)も対象児童の全員調査によって明らかにした¹⁰⁾。検討された特徴は、ほかの子の上に立ちたいという「対人優越性願望」、「ほかの子を動かすのに使用する対人ストラテジー」、「人気度」、「リソース支配力」などであった。

Olthofらが得た知見の中でも重要なものは、「いじめ首謀者」は、粗暴な子というステレオタイプとは逆に、人気度も能力も高いことである。「対人優越性願望」はクラスで最も高く、それを達成するために「いじめ首謀者」は、「アメとムチの両方」を使う割合がクラスでも最も高かった。教師の評価も高い。この結果は、Becnelが「いじめ」を扱った絵本研究論の中で指摘した「いじめ首謀者」のタイプと一致している⁶⁾。こうした知見を考えあわせると、「いじめ」の最大の要因は実際には首謀者の「対人優越性願望」だといえるだろう。

もう一つ重要なのは、「傍観者」についての結果である。世界各国で最も広く使用されているSalmivalliらによる「いじめ」対応教育のKiVaプログラムでは「傍観者」を犠牲者のための「擁護者」に変える方策が推奨されており¹¹⁾、日本の文部科学省⁹⁾も、“周辺で暗黙の了解を与えている「傍観者」の存在にも注意を払い、集団全体にいじめを許容しない雰囲気形成されるようにすることが必要である”としている。

しかし、Olthofらの結果(表1)は、「傍観者」は「対人優位性願望」がクラス内で最も低く「人気度」も「リソース支配力」も低い、「威圧的対人ストラテジー」の使用率もクラス内で最も低い、いわばクラス内での「対人最弱者」であり、対人的にも健康な「擁護者」とは全く異なるタイプであることを示していた。また、Pozzoli & Gini (2010)による研究¹²⁾は「傍観者」が「いじめ」に無関心なのではなく、自分が何もできないことに苦悩している存在であることを明らかにした。それゆえ、「傍観者」が全く異なるタイプの「擁護者」に変身するのは、理想は別として現実には困難であることが推測される。実際に、いじめは学校という場で行われることが多いために、いじめの解決には教師の介入が最大の効果(25%)をあげており、親による助けが12%だったのに対して、他の子どもの助けは5%にとどまっていることを示す調査もある¹³⁾。今回分析対象になった日米の絵本で、「無関心だった傍観者が擁護者になる」ことでいじめが解決されるというステレオタイプのストーリーが主なのか、それともOlthofらやPozzoli & Giniが明らかにした「苦悩する対人弱者としての傍観者」の特徴を持って描かれるのかを明らかにするのは、一つの課題になるだろう。

表1 「いじめ」での7つの役割と特徴 (Olthof et al., 2011)

役割 (割合)	特徴
いじめ首謀者 (6.7%)	<ul style="list-style-type: none"> ・対人優越性願望は、クラスで最も強い。 ・仲間を動かすのにアメとムチ (威圧と利益) を使い分ける率は、最も高い。 ・「リソース (資源) 支配力」もクラスの中で最も高く、最も「人気」がある、「対人能力が高い」子。
いじめ助手 (9%)	<ul style="list-style-type: none"> ・首謀者の真似をして他の子に「アメとムチ」戦略をとるが、使用率は首謀者よりも低い。 ・「威圧」の使用率はクラスの中で最も高い。 ・「向社会的 (利益を与える) 行動」だけの割合は、クラス内で低い。
(首謀者への) 強化者 (5.8%)	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ助手とほとんど同様な特徴。
いじめ首謀者兼犠牲者 (3.5%)	<ul style="list-style-type: none"> ・「人気度」は低く他の子から支持されないのに「首謀者」と同じような対人戦略をとろうとする。
犠牲者 (7%)	<ul style="list-style-type: none"> ・(結果的な)「集団内孤立者」。
傍観者 (21.7%)	<ul style="list-style-type: none"> ・「対人優位性願望」がクラス内で最も低い。 ・「人気度」も「リソース支配力」も低い、「威圧的対人戦略」の使用率もクラス内で最も低い。「対人最弱者」。
(犠牲者の) 擁護者 (18.4%)	<ul style="list-style-type: none"> ・対人戦略も対人優位性願望もバランスがよい、人気もある程度はある。「対人的に健康な子」。

* オルトフらの研究結果を表にまとめたもの (仁平, 2019)

2-3 「いじめ」と原因帰属

「いじめ」に関する研究のうちでも、とくに近年焦点があてられてきたのは、「いじめ」と原因帰属の関係の問題である。

原因帰属は、一般的に物事の原因をどのようなものに帰属させるかという意味あいの広い概念で、統制の所在 (locus of control) というかたちで明細化されたものである。統制の所在の研究⁴⁾ ⁵⁾ では、物事の成功・失敗は努力や能力などの自分の内部にある要因によってコントロールされていると考える「内的帰属」傾向を持っているのか、運や他者などの自分の外部にある要因によるのだと考える「外的帰属」傾向を持っているのかが行動に影響することが明らかにされてきた。

小学生あるいは中学生を対象にした「いじめ」と原因帰属の関係についての一連の研究では一貫した結果が得られている。それは、「いじめ」の被害者 (犠牲者) になる子どもには、出来事の成否は自分の努力や能力などの内的な要因によってはコントロールできないと考える「外的帰属」傾向がみられることである¹⁴⁾ ¹⁵⁾。

「いじめ」と原因帰属の関連については、最近、Kobayashi & Farringtonは日米の大学生を対象にした比較文化的な実証研究¹⁶⁾によって、外的帰属傾向が「いじめ」と関連することを明らかにした。この研究では、“「いじめ」はまったく悪いこととはかぎらない”という「いじめ」に対する許容的な態度も、“自分に起こった不幸な出来事は運が悪いせいだ”とする外的な原因帰属傾向も、日本人の大学生の方がアメリカ人大学生に比べて有意に高いことが確認された。また、高校生のときの「いじめ」体験は日本人大学生で頻度が高いことも確認された。さらに、日本人大学生で高校生の時の「いじめ」体験が有意に多い傾向が、一人ひとりの外的帰属傾向を統計的に統制すると消失する結果は、外的帰属傾向が「いじめ」の要因だったことを示していた。

2-4 絵本の比較文化的検討で候補絵本選定の等価性を担保する手続き

絵本の比較文化的な検討を行うときに問題になるのは、比較されるそれぞれの国の間で絵本がある程度の等価性をもって選択されているかどうかである。

(1) 「いじめ」絵本ではないが、絵本の画像要素数の日米比較を行った研究¹⁷⁾では、選定は次のように行われている：①アメリカは、全国5つの郡立あるいは市立図書館のうち「2つ以上」のウェブサイトで推奨されている絵本。日本は、全国5つの県立あるいは政令指定都市立図書館のうち「2つ以上」のウェブサイトで共通に推奨されている絵本。つまり、図書館の規模のある程度の等価性と、複数のソースでの絵本の重複という条件である。

(2) 「安全教育」絵本の中国-西洋（アメリカ・ドイツ・オーストラリア）比較の研究¹⁸⁾では、選定基準は西洋の絵本は「Amazon」で検索し安全教育絵本としてヒットした上位のもの、中国の絵本はそれと国内では等価といえるネット販売サイト「当当網（Dangdang.com）」の書籍販売部門でヒットした上位の絵本になっている。この研究で条件とした等価性は、それぞれの国内ネット販売サイトのサイズだといえる。

いずれにしても、2つの国の絵本の比較では、なんらかの意味での等価性を担保する手続きがとられている。

2-5 「いじめ」絵本の比較文化的検討

「いじめ」絵本の比較文化研究について、国際的なレベルの文献データベース（Eric, PsycINFO, およびMedline）の検索では、「picture books」×「bullying」×「cross cultural studies(research)」の積集合の文献を検索したが、該当する研究はヒットしなかった。

日本国内の論文に限定されることになるが、日本語文献をGoogle Scholarで「絵本」×「いじめ」×「国際比較（比較文化）」の組み合わせで検索をすると2022年刊行の大学紀要論文1件¹⁹⁾がヒットした。

この研究では、所属大学の絵本データベースと検索サイト（絵本ナビ、国会図書館データベース、Amazon、WorldCat、Goodreads）で、「いじめ/bullying」をキーワードに絵本を検索し、他の検索サイトからの絵本も追加するという手続きがとられていた。さらに、最終的には「いじめ側」または「傍観者」の心情が描かれている絵本に対象が限定された。したがって、結果的に多様なソースから検索を行っただけになり、前述のような国の間で基準の等価性が担保されていない。また、「いじめ」に関する分析項目は、「いじめの形態と場、主人公の役割、いじめの要因、傍観者の有無、結末、大人の関与」になっていて、役割についても「いじめ側」と「傍観者」という限定的なものが扱われている。ただし、この研究の第2部は、大学生を対象にして絵本を材料に「いじめ」被害者と加害者の立場に分かれた読み合いとディスカッションを行い、効果を検討しており、全体としては「いじめ」絵本の包括的な研究になっている。

3 本研究における分析の観点

絵本一般は、言語の発達、感情の発達、あるいは読み手と子どもの親密な関係の促進のほか多様で広い目的を持った媒体である。その中で「いじめ」をテーマにした絵本は、その内容からしてすぐれて子どもの教育を目指す媒体であるといえるだろう。

本研究では日米の「いじめ」絵本の比較を行うが、それぞれの国の絵本は子どもたちにどのような「いじめ対応」を教えようとしているかを明らかにすることが、分析の第一の目的になる。

「いじめ」はどのようにして起こるのか、どう対処すればよいのか、解決をもたらす要因は何なのか、誰が苦境に介入してくれるのか、最終的にどのように解決されるのかは、「いじめ」絵本に含まれる情報でも特に重要なものである。前に紹介してきた「いじめ」絵本の内容分析の研究^{1,2,3}では「解決」は重要な要素の一つであった。その解決を位置づける背景として、「いじめ」絵本が問題解決の成功・失敗の要因が運や他者など自分の外部にあるのか、それとも努力や能力など自分の内部にあるのかという「原因の所在」⁴⁾⁵⁾は、「いじめ」絵本を分析するのに必要な視点になる。

そのために、首謀者・いじめ助手や強化者、犠牲者、傍観者、擁護者など「いじめ」でのどの「役割」が取り上げられ、それぞれの役割の子の「特徴」がどう描かれるか、犠牲者自身はどのような「対応」を示すか、誰が「解決」に決定的な役割を果たしているか、本人か他の子どもか、あるいは親や教師などの強力な他者なのか最終的に何が解決をもたらしたのかなどについて比較を行う。「いじめ」絵本をかく側も読む側も、「いじめ」の実態や真に有効な対応について十分な知識を持っているとは限らないからである。

4 日米の「いじめ」絵本の選定

文化比較を行う絵本の代表性を担保するために、海外の研究が比較文化的検討でとった重複ソースを条件とする手続きにならって、日米間で絵本の選定基準ができるだけ同等になるように、次の(1)～(3)のソースから選定を行った。

(1) Amazonの書籍サイトの情報：日本では「いじめ・絵本」で検索。アメリカの絵本の検索では、リスト「*Best Sellers in Children's Books on Bullying*」を使用。

(2) Amazon以外の日米の代表的な書籍・絵本情報サイト：アメリカでは「DOING GOOD TOGETHER」、日本では絵本の情報サイト「ピクトブック」の「いじめ」(bullying)絵本リストにある絵本。

(3) 代表的な都市の、ある程度の規模をもった図書館の「いじめ」(bullying)絵本リスト：アメリカでは New York Public Library、日本では東京都立多摩図書館。

除外条件は、①初版年（「いじめ」についての考え方は研究の公表によって変る可能性が考えられるので、国際的に「いじめ」研究が急増し始めた2000年以前の初版本は除外）、②非オリジナル・ストーリー絵本（ドキュメンタリーや対応教育本・ガイドブック等は除外）。③分冊本・シリーズ本は除外、④文章中心本（絵に比して文章が多く、絵本のカテゴリーに入れにくいものは除外）。

上記の(1)(2)(3)の2つ以上のソースで共通にとりあげられている重複絵本を、日米の代表的な「いじめ」絵本として分析に使用した。アメリカの絵本で、2つ以上のソースで共通にとりあげられている、かつ除外条件に抵触しないものは5冊であった。日本の場合、2つのソースで共通していたものは4冊だったため、絵本紹介サイト「絵本ナビ」で「いじめ」絵本として紹介されているという条件を加えて、5冊を選定した。

日本の分析対象絵本は、『みずいろのマフラー』『ともだちになった日』『「おに」と名づけられた、ぼく』『てるちゃんのかお』『とげとげ』であった。アメリカの分析対象絵本は『*The Invisible Boy*』『*I Walk with Vanessa*』『*The Juice Box Bully*』『*My Secret Bully*』『*Each Kindness*』であった（書誌情報は表2及び表3参照）。

表2 分析対象絵本（日本）

書名	文 絵	初版年	出版社
『みずいろのマフラー』	くすのきしげのり 松成真理子	2011	童心社
『ともだちになった日』	花光翔太 みやじまみほこ	2021	みらい パブリッシング
『とげとげ』	内田驎太郎 佐藤茉莉子	2010	童心社
『「おに」と名づけられたぼく』	木根尚登 (原案 寺井広樹) もずねこ	2017	TO ブックス
『てるちゃんのかお』	藤井輝明 亀澤裕也	2011	金の星社

表3 分析対象絵本（アメリカ）

書名	文 絵	初版年	出版社
『 <i>The Invisible Boy</i> 』	Trudy Ludwig Patrice Barton	2013	Alfred A. Knopf.
『 <i>My Secret Bully</i> 』	Trudy Ludwig Abigail Marble	2004	Alfred A. Knopf.
『 <i>The Juice Box Bully</i> 』	Bob Sornson & Maria Dismundy Kim Shaw	2011	Early Learning Foundation
『 <i>I Walk with Vanessa</i> 』	Kerascoët (author & illustrator)	2018	Random House
『 <i>Each Kindness</i> 』	Jacqueline Woodson E. B. Lewis	2012	Nancy Paulsen Books

5 結果と考察

紙幅の都合上、日米の特徴の違いのうち本質的なものに絞って結果を述べ考察をしていくこととする（詳細は、表4及び表5参照）。

なお、表の絵本の内容項目の判断は一人の著者が行い、判断の信頼性を確認するために、それとは独立に、もう一人の著者が判断を行い、判断の一致率を求めた。判断は、表のそれぞれの欄に記述した表現に微細な違いがあっても表の修正の必要がないような違いであれば「一致」とした。その結果、全部のカラムについて一致率は92.5%で、慣例上十分に信頼できる範囲にあるといえた。不一致は、基本的に普通とられる手続きである、合議によって解消した。

このようにして、日本とアメリカの「いじめ」絵本を比較することで、2つの国の「いじめ」対応についての考え方、さらに「いじめ」という問題をこえて子どもに何を育てようとしているかの姿勢に、大きな違いがあることが浮かび上がってきた。しかも、この文化的な違いは、絵本ではないが、前にあげた「いじめ」と原因帰属一般の関連について最近行なわれた日米比較の実証的研究¹⁶⁾の結果と一致するものであった。

表4 日本の「いじめ」絵本の特徴

書名	いじめの形態	役割の分化	犠牲者の特徴	加害者の特徴
『みずいろのマフラー』	・物理的（仕事の押しつけ） ・社会的（ルール無視の勝つまでジャンケン強制）	・犠牲者 ・加害者（複数）	・年度途中の転入生 ・低い身体能力と学力	・加害者の一人がストーリーテラー
『ともだちになった日』	・言語的（からかい） ・物理的（物隠し） ・身体的（暴力）	・犠牲者 ・加害者 ・いじめ助手	・行動や話し方が変 ・興味の偏り ・集団からの孤立	・人気者 ・スポーツ得意 ・力が強い
『とげとげ』	・社会的（排斥） ・身体的（暴力）	・犠牲者 ・非特定の加害者（“みんな”）と特定の加害者（サル） ・擁護者（ヤマアラシ）	・身体にとげのある架空の生物	・いじめの主体は“みんな”であり、暴力的なサル以外は不特定
『「おに」と名づけられたぼく』	・社会的（排斥・無視） ・言語的（からかい） ・身体的（投げつけ）	・犠牲者 ・加害者（集団）	・「おに」という名前 ・ツノ	・不特定
『てるちゃんのかお』	・社会的（排斥） ・言語的（からかい）	・犠牲者 ・加害者（不特定）	・幼児期からの容顔の変容	・不特定

表4（続き）日本の「いじめ」絵本の特徴

書名	犠牲者の対応	親・教師・他者の介入	解決の要因	物語のソリューション
『みずいろのマフラー』	・いじめられても一緒に遊ぶという「いじめ」ではよく見られる反応	【母親】 ・母親が加害者に直接的に介入（注意・手紙）	・被害者の母の死 ・死後に母からのプレゼントのマフラー（加害者たちへ）	・本人の転校 ・加害者の後悔（涙）／謝罪
『ともだちになった日』	・加害者の母の死を知って共感して泣く	【教師】 ・加害者の母の死を子どもたちに説明 ・加害者が犠牲者の係仕事の代替を申し出たのを支持	・加害者の母の死 ・加害者の悲しみ（母の死）への犠牲者の共感（泣き）に加害者が反応	・和解（欠席した犠牲者の係仕事の代替を加害者が申し出る）
『とげとげ』	・排斥にも暴力にも基本的には「回避」	【同じ特徴を持つ擁護者】 ・同じ「とげ」を持つヤマアラシによる助け	・同じ境遇の者（ヤマアラシ）との親密化・結婚	・「とげ」の緩和と別世界での生活の開始であり、いじめの解決ではない
『「おに」と名づけられたぼく』	・集団から孤立 ・不登校	【母】 ・やさしい母の対応 ・いじめには不介入	・母の涙 ・希死念慮による死後の世界のイメージの中で家族が願った命名の理由（強さ）を知る	・ツノの消滅 ・名前への肯定 ・いじめは不解消
『てるちゃんのかお』	・親の勧める学習／習い事での努力	・転校 ・子にたくさんの習い事 ・母親は主人公と同じ学習を自分でも必死で努力し行い献身 ・母が近隣の人や教師に対応を依頼	・後年、医学の道に進み、容顔の変容について教育	・いじめの短期的解決ではない ・長期的な自己の特徴の受容肯定

表5 アメリカの「いじめ」絵本の特徴

書名	いじめの形態	役割の分化	犠牲者の特徴	加害者の特徴
『 <i>The Invisible Boy</i> 』	対照的ないじめ ・主人公：社会的（無視） ・副主人公：言語的（からかい）	・犠牲者（対照的2人） ・加害者（ほとんど無意図的）	・主人公：目立たない（ブライアン） ・副主人公：異なる食文化（ジャスティン）	・加害者は特定されない
『 <i>My Secret Bully</i> 』	・親友のようなふりをしながら、かげで社会的排斥（かげ口） ・無視	・犠牲者 ・加害者 ・傍観者	・特徴らしい記述なし	・二面性のある交友者
『 <i>The Juice Box Bully</i> 』	・物理的（ボールを奪う） ・身体的（パックのジュースをかける）	・犠牲者 ・加害者 ・擁護者	・クラス集団に適応している犠牲者	・転入生 ・粗暴な加害者
『 <i>I Walk with Vanessa</i> 』	・社会的（孤立） ・言語的（威嚇）	・犠牲者 ・加害者 ・アプローチしてこない者には対応しない傍観者たち ・擁護者	・反撃しない／他の子にアプローチしない大人しい犠牲者	・粗暴な加害者
『 <i>Each Kindness</i> 』	・社会的（無視・拒否） ・言語的（からかい、笑い、あだ名）	・犠牲者 ・加害者	・転入生 ・貧しい身なり	・加害者はクラスの多数で、首謀者は特定されない

表5（続き） アメリカの「いじめ」絵本の特徴

書名	犠牲者の対応	親・教師（強力な他者）の介入	解決の要因	物語のソリューション
『 <i>The Invisible Boy</i> 』	・主人公（無視の犠牲者）：全体には特に目立った主張をしない ・もう一人の“犠牲者”（副主人公）に親和的にアプローチ	・親や教師の介入は特にならない	・副主人公である新転校生に親和的手紙 ・副主人公が主人公の得意な絵（能力）を評価・交流	・主人公と副主人公との交流が他の子に波及、無視の解消。
『 <i>My Secret Bully</i> 』	・加害者に理由を聞くが、合理的な説明なし	【母】 ・母親は、加害者に直接介入しない、 ・主人公である犠牲者に、加害者にかげ口を許さないという対応を言語化するロールプレイを練習させる（主人公のエンパワーメント）	・犠牲者自身が、加害者に対面して、かげ口を許さないことを言明・対決	・加害者は赤面 ・犠牲者は、自分に自信を持って、他の新しい友だちをつくるようになった。
『 <i>The Juice Box Bully</i> 』	・加害者にクラスの他のメンバーに告げて対応することを言明	・教師の直接的介入はない ・被害者も含めた子どもたちがクラスには「教師との約束」があり行動を変えるように加害者を説得	・多くの擁護者の出現	・加害者は謝罪し、犠牲者や擁護者、クラスメンバーと和解
『 <i>I Walk with Vanessa</i> 』	・恐怖でシュリンクするだけ	・親や教師の介入は特にならない	・孤立する犠牲者と積極的に交流しようとする擁護者	・擁護者との交流がクラスの他の子に波及し、孤立は解消
『 <i>Each Kindness</i> 』	・一緒に遊ぶことを求めるが、拒否・無視されるとあきらめる	・親や教師の介入は特にならない	・ない	・犠牲者は転校 ・いじめの解決は無く主人公は後悔のみ

5.1 いじめの発生にかかわる要因のちがいが一目立つことと目立たないこと

違いの一つは、いじめの発生に関連する要因である。日本の5冊の絵本のうち3冊が「外面的な差異」を「いじめ」の要因として取り上げている。「とげ」（『とげとげ』）、「つ（名前）」（『「おに」と名づけられた、ぼく』）、「容顔の変容」（『てるちゃんのかお』）である。このほかに『ともだちになった日』のいじめ対象者は、教師の対応からすると障害が推察されるような、特異的な行動や話し方の違いによって加害者からいじめを受け、他の子からもからかわれている。『みずいろのマフラー』でいじめ被害を受ける転校生の子は、“ちからがよわい・はしるのがおそい・さんすうがにがて”であるとして描かれている。このように、日本の5冊のうち3冊で、特異的な行動や話し方を含めれば4冊で、外面的に「目立つこと」が「いじめ」の要因になっているといえる。

これに対してアメリカの絵本のうち、『*The Invisible Boy*』（邦題『みんなからみえないブライアン』）では、題名に象徴されているように、「目立たない子」が無視をされることが問題視される。“みんなから からかわれるのと、みんなから みえないのと、どっちが つらいのか かんがえてたんだ”（さくまゆみこ訳）という表現に、その違いがあらわれている。

『*Each Kindness*』に登場する貧しい服装の転校生は、うつむき加減の声も小さな目立たない女の子であるが、貧しい服装のゆえにいじめを受けることになる。一方、『*My Secret Bully*』の犠牲者は、かくれたいじめをする巧妙な友だちを非難することができる普通の女の子、『*I Walk with Vanessa*』は他の子に積極的に交わろうとしない段階の目立たない、無視を受ける転校生、『*The Juice Box Bully*』では、犠牲者は特定の子どもではなく、粗暴なジャイアントの転校生によって被害を受ける、クラスの子どもたちである。このうち強いて犠牲者で外形的に目立つ要素といえば、「貧しい服装」になるだろう。

ただし、「目立つこと・目立たないこと」の要因の割合の日米差は、差を大きく見積もった場合でも統計的に有意にはならない（4/5:1/5; Fisherの直接確率検定、 $p = 0.206$ ）。このほかの特徴として付け加えれば、「いじめ」絵本では、「転校生」の犠牲者は、日米共通の一つの潜在的テーマであるといっていよう。

5.2 傍観者から擁護者へ変ることの難しさ

日本の文部科学省⁹⁾やフィンランドの Salmivalli ら¹¹⁾が理想とする「無関心だった傍観者が擁護者になる」ことでいじめが解決されるというストーリーが、絵本でどの程度みられるかを分析するのも本研究の課題の一つであった。

他者の言動をきっかけに、他の子どもたちが無視や傍観をしなくなり犠牲者の「擁護者」になるというストーリーを含む絵本は、アメリカの絵本『*The Juice Box Bully*』、『*I Walk with Vanessa*』が典型的なものである。

他方、日本の「いじめ」絵本では、『てるちゃんのかお』の主人公は、母親が周囲の人間に依頼することで、周囲との交流が改善される。この場合、母親は最初から傍観者ではない。他の絵本でも、「傍観者の擁護者への変化→いじめの解決」という希望のストーリーは含まれていない。文部科学省⁹⁾がいじめ対応で示唆する「共感性が育つことで傍観者が自発的に擁護者になる」という理想は、現実のいじめ経験者を対象にした調査⁷⁾でも、絵本でも、メインストリームではないのかもしれない。

なお、Olthof らが明らかにした、有能で「アメとムチ」の使い分けをするような「いじめ首謀者」の実態と合致するのは、『*My Secret Bully*』の、裏で巧妙な「いじめ」をする女の子、日本の絵本では『ともだちになった日』の、クラスの人気者で、スポーツも得意・力も強い加

害者だけにとどまっていた。このような「人気者」の加害者という実態は子どもには容易には理解しがたく、絵本では扱いにくいためだと考えるのが妥当だろう。

5.2 母親の役割

日米で何が「いじめ」解決の決定的要因になっているかの違いを見ると、最大の要因は母親であった。日本の5冊中の4冊で、いじめの解決に母親が最終的に寄与している。『みずいろのマフラー』では、犠牲者の母親が加害側の子どもに直接に注意とお願いをし、さらには犠牲者の「母親の死」とマフラーのプレゼントが加害側の後悔を引き出している。『ともだちになった日』でも、加害者の母親の死とその悲しみへの犠牲者側の共感が和解の要因になっている。『「おに」と名づけられたぼく』でも、母の涙が主人公のイメージを誘発して考え方の変容をもたらしている。『てるちゃんのかお』でも、母は子どものいくつもの習い事や学習を自分も必死でマスターしようと努力し、子どもの動機づけをはかっている。これは母親が子どものエンパワーメントのエージェントだというよりは、一体化をしているレベルだといってよいだろう。さらに「いじめ」絵本について付言すれば、父親に何の役割も与えられていないことは注目してよい点である。

アメリカの絵本でも、『*My Secret Bully*』の母親は、子どもに「いじめ首謀者」にアサーションをするようにロール・プレイングを訓練するが、母親は子どものエンパワーメントのエージェントであって、最終的にいじめ首謀者に立ち向かうのは子ども自身、子どもの力である。他の絵本でも、教師や親という「強力な他者」は、あくまでも子どもを指導することによって子どものエンパワーメントをはかる者であって、「いじめ」解決の最終的な担当者は子どもあるいは子どもたち自身である。

5.3 「いじめ」絵本が育てようとするもの

日本の絵本で母親が、「いじめ」の解決の最終段階で、被害側あるいは加害側の母親自らの「死」によって極めて強い情動を喚起するケースを含む、決定的な役割を果たしているケースは、5冊中の4冊だといえる。他方、アメリカの絵本では、母親が子どもに「いじめ」対応を教えエンパワーメントのエージェントになることはあっても、「いじめ」側と直接対決するのは子ども自身であった。この文化的な差は統計的に有意なものであった（Fisherの直接確率検定、 $p = 0.047$ ）。アメリカの場合、最終段階で解決に寄与しているのは、親や教師ではなく、他者ではあるが自分のチームとなる「擁護者」も含めて、解決は自分たち子どもにあるという考えを絵本は育てていることになる。言い換えると、原因帰属に関して、アメリカの「いじめ」絵本は、子どもに物事の解決の最終的な決定因は、自分あるいは自分たちの内にあるという「内的帰属」型の考え方を形成させることを暗黙のうちに意図している。他方、日本の「いじめ」絵本は、結果的に、子どもに物事の解決の最終的な決定因は自分の外にあるという「外的帰属」型の考え方の形成をはかっているといえるだろう。

この傾向は「いじめ」の問題に限らず、子に起こった問題の原因帰属に関する比較文化研究の結果とも一致している。アメリカの親は、子どもに起こった行動上や学業上の問題は、子ども自身の要因によるものだという判断をしており²⁰⁾、日本の親は、子どもに起こった問題の要因は子ども以外の要因、とくに母親にあるという判断をしている²¹⁾からである。

本研究の結果が示唆しているのは、「いじめ」絵本を分析しようとするときに重要なのは、絵本のストーリーではどのような解決パターンがみられるかというような表面的な内容ではないことである。分析をする上で最終的に重要なテーマの一つは、そのような内容に通底している「いじめ」の解決に象徴されるような人生での成功・失敗をコントロールしている要因について、絵

本が子どもにどのような信念を育てようとしているのかという視点である。すなわち、人生での成功・失敗は運不運や他者など自分の外部にある要因が支配していると教える「外的帰属」の信念を育てようとするのか、それとも自分自身の努力など内部の要因によって変りうると教える「内的帰属」の信念を育てようとするのかである。また、成功には善意の他者の支援や犠牲が助けになることがあるという信念も、そこに加わるかもしれない。実際にこうしたメッセージも、「いじめ」絵本にはしばしば含まれている。

絵本の製作者は、このことを意識することによって、「いじめ」の問題に限らずどのような作品を生み出すかが変わってくるだろう。とくに日本の「いじめ」絵本の製作者は、いじめ解決の原因帰属について「内的帰属」の考え方を積極的に育てようとするものの割合を増やすことで、絵本が育てる考え方に多様性をもたらすことができるだろう。

6 本研究の限界と将来の展望

本研究は、2 国間、それも 5 冊だけの比較であり、あくまでも第一段階の試みだと考えるのが適切である。今回の基準による絵本の選定は、完璧なものとはいえないかもしれないし、情報のソースも他にもっと適切なものもあるかもしれない。また、分析対象絵本の代表性を担保するために設けた「2 つ以上のソースの重複」という条件も絶対に必要だとは限らないかもしれない。絵本対象年齢の分析も不十分なままである。さらに、絵本の重要な要素である、絵画的情報の分析は、今回行えなかったが、今後の検討対象として重要な意味を持つ情報を含んでいた。対象になった「いじめ」絵本を見ていくと、どの絵本の登場人物の顔にも、心理学の分野で基本的な 6 種の感情とされる「怒り・嫌悪・恐怖・喜び・悲しみ・驚き」の特徴が豊かに表現されているからである。

また、今回の比較は、アメリカの絵本との比較に限定されたものであった。アメリカを取り上げたのは、一つには、絵本の出版数の多さ、入手しやすさなどによって日米の比較基準を同等化しやすいという理由の他、比較文化、比較教育、異文化間コミュニケーションの視点から日米を対象とした先行研究が多く、本研究の結果をより包括的な視点から検討する可能性を提供すると判断したことにある。

もう一つの理由は、量的な基準からである。Ovid 社が提供する国際的水準の文献データベース全てを使用して、キーワード「picture books」「bullying」と各国名の 3 つの積集合でどのくらいの文献がヒットするかをみると、確かにアメリカ (USA) は、英国、フランス、イタリアなど西欧諸国やロシア、さらには中国、韓国などの東アジア諸国に比べてヒット数は多くなる (2023 年 11 月現在のヒット数は、アメリカの 5 に対して、それぞれ、4, 2, 3, 1, 4, 4)。その意味では、この研究を日米比較からスタートしたのは適切だったといえるかもしれない。

しかし、さらに他の文化との比較に目を向けていくことで、日米それぞれの特徴も世界の中に位置づけていくことができる。アパルトヘイトのあった南アフリカ、ナチスの行為を振り返ってきたドイツ、カースト差別への対応に現在でも苦慮しているインドの「いじめ」の考え方には、また違った色彩がうかがえるからである。実際、この 3 国について上記の検索をすると、アメリカの場合と同等かそれ以上のヒット数になっている (それぞれ、5, 7, 5)。今後、さらに多くの国の「いじめ」絵本について比較を行っていくことで、絵本の新たな世界マップが明らかになることが期待される。

引用文献

- 1) Oppliger, P. A. & Davis, A. (2016) 'Portrayals of bullying: A Content analysis of picture books', *Early Childhood Education Journal*, 44, 515–526.
- 2) Wiseman, A. M. & Jones, J. S. (2018) 'Examining depictions of bullying in children's picturebooks: A content analysis from 1997 to 2017', *Journal of Research in Childhood Education*, 32(2), 190-201.
- 3) Jang, W. & Kim, M. (2020) 'Victims' characteristics, coping strategies, and problem resolution in picture books for young children on bullying', *Asia-Pacific Journal of Research in Early Childhood Education*, 14(2), 159-178.
- 4) Rotter, J. B. (1966) 'Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement.' *Psychological Monographs: General and Applied*, 80 (1), 1-28.
- 5) Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W. U., & Cook, R. E. (1972) 'Causal ascriptions and achievement behavior: A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control', *Journal of Personality and Social Psychology*, 21(2), 239-248.
- 6) Becnel, K. (2013) 'Sticks, Stones, and Sneering Tones: The librarian's role in ending the bullying epidemic' *Children & Libraries: the Journal of the Association for Library Service to Children*, 11(3), .10-15.
- 7) Olthof, T., Goossens, F. A., Vermande, M. M., Aleva, E. A., van der Meulen, M. (2011) 'Bullying as strategic behavior: Relations with desired and acquired dominance in the peer group', *Journal of School Psychology*, 49, 339–359.
- 8) Salmivalli, C., Lagerspetz, K., Bjorkqvist, K., Osterman, K., & Kaukiainen, A. (1996) 'Bullying as a group process: Participant roles and their relations to social status within the group', *Aggressive Behavior*, 22,.1-15.
- 9) 文部科学省『文部科学大臣決定—いじめの防止等のための基本的な方針』文部科学省、2013.
- 10) 仁平義明「『いじめ対応』3つの考え方—傍観者重視のKiVaプログラム・オルトフの首謀者介入モデル・文部科学省の方針—」『星槎大学紀要 共生科学研究』No.15、24-44、2019.
- 11) Salmivalli, C. (2016) . *Evidence-based prevention of bullying and cyberbullying with the KiVa antibullying program*. 2016. https://dge.mac.pt/sites/defanet/files/Noticias_Imagens/4.kiva-portugae.pdf (2020.1.22. 閲覧).
- 12) Pozzoli ,T., & Gini , G. (2010) 'Active defending and passive bystanding behavior in bullying: The role of personal characteristics and perceived peer pressure', . *Journal of Abnormal Child Psychology*, 38,.815-827.
- 13) Frisé, A., Hasselblad, T., Holmqvist, K. (2012) 'What actually makes bullying stop? Reports from former victims ', *Journal of Adolescence*, 35, 981–990.
- 14) Radliff, K. M., Wang, C., & Swearer, S. M. (2015) 'Bullying and Peer Victimization: An Examination of Cognitive and Psychosocial Constructs', *Journal of Interpersonal Violence*, Advance online publication. doi:10.1177/6880886260515572476
- 15) Georgiou, S. N., Ioannou, M., & Stavrinides , P. (2017) 'Parenting styles and bullying at school: The mediating role of locus of control', *International Journal of School & Educational Psychology*, 5(4), 226-262.
- 16) Kobayashi ,E., & Farrington, D. P. (2020) 'Why do Japanese bully more than

- Americans? Influence of external locus of control and student attitudes toward bullying’, *Educational Sciences: Theory & Practice*, 20(1), 5-19.
- 17) Kuwabara, M., Alonso, J., & Ayala, D. (2020) ‘Cultural differences in visual contents in picture books’, *frontiers in Psychology*, 11, 1-7, published online, 25 February.
- 18) Xie, Z. (2022) ‘Comparative analysis between Chinese and western picture books for children in safety education’, *Open Journal of Social Sciences*, 10, 328-343.
- 19) 田中健夫 (2022) ‘いじめ加害者の心的世界についての比較文化的研究— 絵本における表現と心理教育の可能性—’, 東京女子大学比較文化研究所紀要, 83 巻, 13-29.
- 20) Compas, B. E. Friedland-Bandes, R., Bastien, R., & Adelman, H. S. (1981) ‘Parent and Child Causal Attributions Related to the Child's Clinical Problem’, *Journal of Abnormal Child Psychology*, 9 (3), 389-397.
- 21) 仁平義明・大類純子 (1999) ‘自責謙遜する日本の母・自己効力感を持つ韓国の母—父母の原因帰属スタイルの日韓比較—’, 日本心理学会第 63 回大会発表論文集, 78.

『横浜絵本研究會 REPORTS』の方針

『横浜絵本研究會 REPORTS』は、オリジナリティ・発見・新しい視点を大事にしています。著者自身が責任をもって適切な引用を行い、概念、考え方、図表などの剽窃が無いように注意します。また、調査や実験を用いた研究では、研究倫理上も問題がなく、対象者にインフォームド・コンセントやアセントを得ていることを著者が確認しています。